

[論文]

友人に対する「冗談関係の認知」の 正確性の検討（2）

葉山大地

- 〈目次〉
1. 問題と目的
 2. 実験1
 3. 実験2
 4. 本研究のまとめ

1. 問題と目的

私たちは、相手との関係性の変化によってその言動を多様に変えていく。その変容を、葉山・櫻井（2008a, 2008b）は冗談を言い合うという行為に適用し、友人に対する冗談が過激になっていくプロセスのモデル化を試みている。その中で、中核的な心理概念として導出されたのが、関係スキーマ（Baldwin, 1992）の1つとして定義される「冗談関係の認知」である。冗談関係（joking relationship）とは、人類学者である Radcliffe-Brown（1940/1952）が提唱した概念であり、「他の人を冷やかしたり、からかったりし、そのからかわれた方はそれに対して何ら立腹してはならないという二者間の関係」と定義される。

関係スキーマとは、相手との過去の相互作用を通して形成されたお互いの関係についての知識の枠組みであり、(a) 対人的スクリプト、(b) 自己スキーマ、(c) 他者スキーマから構成される（Baldwin, 1992）。対人スクリプトは「if-then 構造」（「もし○○なら△△だろう」という推測の枠組み）を有し、相互作用をする二者の役割スロット（自己スキーマと他者スキーマ）を有する概念である。自己スキーマは相手との二者関係における自己に関する知識の枠組みを指し、他者スキーマは相手との二者関係における相手に対する知識の枠組み（例：わたしと一緒にいるときにその相手はどのような性格や特徴があるのか）を指す。

対人スクリプトの役割スロットにその時の自己スキーマと他者スキーマがはめ込まれることで、自己と相手の関係に相応しいスクリプトが活性化され、その関係において適切な行動が決定される。

葉山・櫻井（2008a）は、友人に対する冗談関係の認知として、「冗談に対する他者理解感」と「冗談に対する被受容感」を取り上げている。葉山・櫻井（2010）は、自分の冗談の好みを理解して自分の好みに合った冗談を言ってくれる相手に対して、親しさを感じ、信頼感を持つ一方、他者を理解する

ことで信頼感や心理的重なりが促進されることを明らかにした。

他者に対して形成する冗談関係の認知は正確であるのだろうか。この問いを検討するため、葉山（2019）では、友人同士をペアにした調査を行った。その結果、一方の回答者が有する他者理解感、もう一方の回答者が有する被理解感と中程度の正の相関がみられる一方、被受容感、もう一方の回答者が有する受容感と有意なペアワイズ級内相関がみられなかった。これは、相手を理解していると感じている時に相手も理解されていると感じるが、一方の回答者が冗談がいきすぎても許してもらえる感覚を形成しても、もう一方が許してあげる感覚を形成しているわけではないことを意味する。相手が形成する関係認知という主観的な指標では、他者理解感と比較的正確であるが、被受容感については正確ではない可能性が示唆された。

関係スキーマは、相手との相互作用に関する過去の記憶から構築され、適切な行動の選択や推測（inference）に影響を及ぼすという特徴を有する（Planalp, 1987）。こうした点に基づくと、冗談関係の認知は、聞き手が好む冗談の推測に影響を及ぼしていると推測される。特に、他者理解感が、冗談に関する相手の嗜好を適切に理解した上で形成したものであるとすれば、特定の冗談についてその冗談を相手が好むかどうかを推測することが可能であると考えられる。すなわち、冗談関係の認知（特に他者理解感）の得点が高いほど、相手が冗談に面白いと思う程度を正確に推測することができるため、相手の冗談の好みを当てることに関する正答数も高くなると予測される。

本研究では、冗談関係の認知の正確性を、実験的手法を用いて検討する。その際、「相手が冗談に面白いと思う程度の推測」に加えて、正確性に関する指標として「相手が好む冗談を実際に当てられた正答数」を取り上げて、冗談関係の認知との関連を検討する。その際、「冗談関係の認知が形成されているほど、相手の好みを正確に推測できるため、正答数が多くなる」という仮説を立てる。

2. 実験1

2-1. 方法

実験参加者 大学生の友人同士のペア18組36名（男性3組6名，女性15組30名，平均年齢20.89歳， $SD=1.10$ ）を対象とした。本実験の参加者は，葉山（2019）と重複している。本実験の実施時期は，2008年10月～11月であった。

実験刺激 実験刺激には，実験者が収集した冗談を36個用いた。実験刺激の選定にあたり，事前に大学生10人に50個の冗談を呈示した。大学生10人には，50個の冗談に対し，面白さと分かりやすさを5段階で評定するよう求めた。上記の手続き後，面白さと分かりやすさの平均値と標準偏差（ SD ）が類似するものを著者及び心理学を専攻する大学生5名で選出し，3個の冗談を1組とし，合計12組作成した（Figure 1）。

	あなたが感じた面白さの程度 をご回答ください	相手が感じると思われる面白さ の程度をご回答ください
① 医師「じつは悪い知らせがあるんです。おまけに更に悪い知らせもあります」 患者「悪いほうから聞かせてください」 医師「あなたの検査結果が出ました、それによるとあなたは後 24 時間しか生きられないんです。」 患者「何ですって！じゃそれより悪い知らせって言うのは何なんです。」 医師「実はその、昨日言うのを忘れてたんです」	<input type="text"/>	<input type="text"/>
② ある週末の朝、妻は夫に言った。 「うちの犬って賢いわ。毎朝、新聞を持ってくるのよ」 「そりゃ、どこ犬でもそれくらいするだろ」 「でも、うちはどことも新聞契約してないのよ」	<input type="text"/>	<input type="text"/>
③ 高校の先生が話してくれたことです。 グラウンド整備をするときに使う大きな「ローラー」のことを「コンダラ」だと言っている人がいたそうです。 なぜ、そう言うのかわ理由を聞くとき昔はやった「巨人の星」の主題歌の冒頭のシーンで、主人公がローラーを引きながら坂道を上るシーンがあり、その時の歌詞が、 「重いんだら 試練の道を・・・」であるが、それを 「重いコンダラ 試練の道を・・・」 と勘違いしていたため、あの引いているのは重たいコンダラであると思った訳である。	<input type="text"/>	<input type="text"/>
1 点：まったく面白くない 2 点：あまり面白くない 3 点：どちらかといえば面白くない 4 点：どちらかといえば面白い 5 点：わりと面白い 6 点：非常に面白い	あなたが一番面白いと感じた 冗談の番号(①～③)	相手が一番面白いと感じると 思われる冗談の番号(①～③)

Figure 1 実験刺激の例

冗談は、インターネット上でジョークを集めているサイト (<http://www.pc-media.co.jp/~dance/omsiroi01.html>) と『バカには絶対解けないナゾナゾ』（白崎博史・石黒謙吾（著）、2007 朝日新聞社）から採用した。インターネットから採用した冗談は『阪急電車の中、3歳位の男の子がおしっこをしている様子。子供「ママおしっこ」ママ「どうしてもっと早く言わへんのっ！」すると子供は何を考えたのか、早口で「ママッおしっこ』』といった内容のものであった。『バカには絶対解けないナゾナゾ』から採用した冗談は、例えば『細胞組織の中で、食べたらいしそうなのはどこ？ 答え：ミトコンドリア（「ミート」「コーン」「ドリア）』』というようにナゾナゾの形式になっているものであった。後者のナゾナゾを冗談として呈示する場合は、答えも併せて呈示した。

2-2. 実験1の手続き

本研究で行った実験の流れは、実験の説明（step 1）、質問紙への回答（step 2）、実験実施（step 3）、事後説明（step 4）の4段階から構成される（Figure 2）。

実験の説明（step 1）においては、実験は何時でも中止できる旨や、実験に参加しないことによって不利益が生じない旨を説明し、同意書への記入を求めた。同意書には、「実験中でもいつでも止めることが出来ること、個人情報外部に漏れる心配が無いこと、についても十分な説明を受けました。その上で、私は実験への参加に同意いたします。その際、同意しないことによって、不利益が生じない点についても説明を受けています」という文章が記載され、文章を読んだ上で署名するよう求めた。署名を拒否する参加者はいなかった。

質問紙への回答の段階（Step 2）においては、葉山・櫻井（2010）で使用した、話し手としての冗談関係の認知に関する10項目（他者理解感、被受容感）および聞き手としての冗談関係の認知に関する10項目（被理解感、受容感）について回答を求めた。話し手としての冗談関係の認知に関する項目

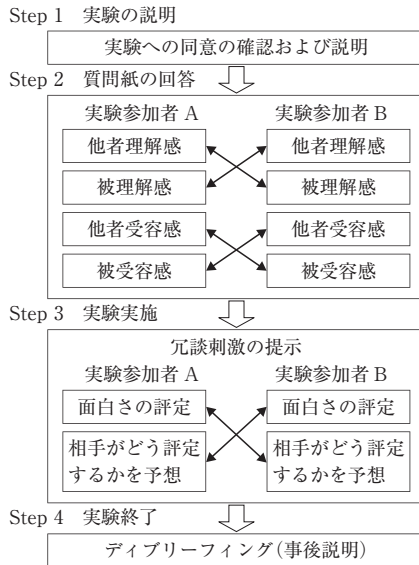


Figure 2 実験の流れ

は、葉山・櫻井（2010）で修正された「冗談に関する他者理解感」（項目例：○○がどんな種類の冗談が好きか理解できている）と「冗談に対する被受容感」（項目例：行き過ぎた冗談であっても○○は怒らないで聞いてくれる）に関する項目を使用した（「全く当てはまらない（1）」～「非常に当てはまる（5）」の5件法）。聞き手としての冗談関係の認知に関する項目は葉山・櫻井（2010）によって作成された、「冗談に関する被理解感」（項目例：○○がどんな種類の冗談が好きか理解できている）と「冗談に対する受容感」（項目例：少し行き過ぎた冗談であっても私は怒らないで聞いてあげる）に関する項目を各5項目ずつ使用した（「全く当てはまらない（1）」～「非常に当てはまる（5）」の5件法）。

実験実施の段階（Step 3）では、以下の2つの手順を1試行とし、全部で12試を行った。最初に、同時に呈示した3つの冗談（①～③）に対して以下

の4つの質問に回答してもらった。

(a) 冗談に関して自分が感じた面白さ：3個の冗談刺激が書かれたプリントを呈示し、3個の冗談それぞれについて、自分が感じた面白さの程度を「まったく面白くない(1)」、「あまり面白くない(2)」、「どちらかといえば面白くない(3)」、「どちらかといえば面白い(4)」、「わりと面白い(5)」、「非常に面白い(6)」の6件法で評定を求めた。

(b) 相手が感じる面白さの推測：同様の3個の冗談それぞれについて、相手を感じると思われる面白さの程度を6件法(「まったく面白くない(1)」、「あまり面白くない(2)」、「どちらかといえば面白くない(3)」、「どちらかといえば面白い(4)」、「わりと面白い(5)」、「非常に面白い(6)」)で推測して評定するよう求めた。

(c) 自分が一番面白いと思った冗談の番号：3個の冗談のうち自分がもっとも面白いと思った番号を回答するよう求めた。

(d) 相手が一番面白いと感じると思われる冗談の番号：3個の冗談のうち相手をもっとも面白いと思う冗談を①から③のうち1つ選択するよう求めた。

実験終了の段階(Step4)では、事後説明を行い、謝礼を渡した。なお、実験の実施時間は約40分であった。

2-3. 実験1の結果

正答数と冗談関係の認知の関連の検討 相手の冗談の好みに関する正答数を算出した結果、平均5.19($SD=1.70$)となった。各個人の正答数と冗談関係の認知の相関を算出した結果、「他者理解感」と「被受容感」ともに有意な相関は得られなかった(Table 1)。

Table 1 正答数と冗談関係の認知の相関係数

	正答数	他者理解感	被受容感
正答数	-	-.15	.03
他者理解感		-	.09
被受容感			-

相手の感じる面白さの推測と冗談関係の認知の関連 冗談刺激の各36個に対して、回答者Aの「相手(B)が思う白いと思うだろう程度(6段階評定)」と回答者Bの『自分が面白いと思う程度(6段階評定)』の相関を求めた。36名の相関の平均は、 $r=.33$ ($SD=0.12$) となった。0を基準とした1サンプルのt検定を行なった結果、この値は有意に0よりも高い値であった。

回答者ごとに算出されたこの相関値を標準化した得点を推測の正確さを示す指標として、冗談関係の認知に含まれる「他者理解感」と「被受容感」との相関を算出した(Table 2)。その結果、有意傾向ではあるが($p<.10$)、「被受容感」が推測の正確さの指標と負の相関($r=-.28$)を示した。

Table 2 推測の正確さ指標と冗談関係の認知の相関係数

	推測の正確さ	他者理解感	被受容感
推測の正確さ	-	.05	-.28 [†]
他者理解感		-	.09
被受容感			-

[†] $p<.10$

冗談の好みに関するペア内の実際の類似度 36個の冗談に対して感じた面白さの程度に関して、ペア内で相関を求めた結果、面白さの評定は1ペアを除き、16ペアで中程度の正の相関($r=.23\sim.58$, 平均 $r=.33$)を示した。0を基準とした1サンプルのt検定を行なった結果、この値は有意に0よりも高い値であった。また、各12試行で「一番面白いと感じる冗談」がペア内で実際に一致した個数の平均を求めた結果、5.39個(12個中)となった。

個人内における冗談の好みの類似度の推測 冗談の面白さについて、各参加者がペア内でどの程度冗談の好みが類似していると推測するかを検討するため、個人内で「冗談に感じた面白さの程度」と「相手を感じると思われる面白さの程度」の相関を求めた結果、全ての回答者において、中程度から非常に強い正の相関($r=.58\sim.95$, 平均 $r=.77$)が認められた。

同様に、各試行で呈示した3つの冗談の中で、「自分が一番面白いと感じた冗談」と「相手が一番面白いと感じるとされる冗談」の選択が個人内で

一致している個数の平均を算出したところ、8.06個であった。

2-4. 実験1の考察

実際の正答数は平均3.92個程度と、比較的低い値にとどまった。特に、「他者理解感」や「被受容感」といった冗談関係の認知は、相手の冗談の好みに関する正答数と有意な相関を示さず、冗談関係の認知の得点の高さが相手の冗談の好みの正答数につながるという結果は示されなかった。以上の結果から、「冗談関係の認知が形成されているほど、相手の好みを当てられるため、正答数が多い」という仮説は支持されなかった。

なお、相手が冗談をどのくらい面白いと思うかに関する推測は、個人差はあるも中程度の相関値 ($r=.33$) を示し、冗談の好みはある程度は推測できるものと言える。「相手が思う白いと思うだろう程度（6段階評定）」と相手の『自分が面白いと思う程度（6段階評定）』が強い正の相関を示すほど、正確に相手の好みを予測できているとみなし、その相関係数を標準化した得点を推測の正確さ指標とみなし冗談関係の認知と相関係数を求めた。その結果、推測の正確さ指標と有意傾向に留まるが、「被受容感」と負の相関を示したことから相手から許されていると認知している実験参加者ほど、推測の正確さが低下することが示唆された。

ペア内の類似度に関して、本研究においては、36個の冗談の刺激に関して実際の評定の類似度は平均 $r=.33$ であったが、個人の中で「冗談に感じた面白さの程度」と「相手を感じると思われる面白さの程度」の相関を求めると、中程度以上の正の相関（平均 $r=.77$ ）が認められた。これはペア間の実際の類似度よりも個人の中で推測された類似度の方が全体的に高いという結果が得られた。これは、実際よりもお互いの冗談の好みがか似ていると過剰に見積もられていることを示唆する。

さらに、3つの冗談の中で、「自分が一番面白いと感じた冗談」と「相手が一番面白いと感じると思われる冗談」の選択が個人内で一致している個数は8.06個であった。これは全試行の66%がこうした回答の仕方を行っている

ことを示し、自分が面白いと思った冗談と、相手が面白いと思う冗談を同じに答える実験参加者が多いという興味深い結果を示唆している。

本実験によって得られた上記の結果は、相手の冗談の好みを推論するプロセスに関して2つの可能性を示す。すなわち、冗談に感じている面白さの推論のプロセスとして、関係スキーマに基づく推測の仕方と、係留と調節に基づく推測の仕方である。関係スキーマによる推測とは、これまでの相手の言動などに基づき、他者についての知識構造を形成し、ステレオタイプや思い込みではなく根拠に基づいて判断する推測である。一方で、係留と調節とは、社会心理学において、人が推測を行う場合、特定の水準（係留点）から推測を開始し、状況や情報に合わせて推測を係留点から調節することで推測を精緻化するストラテジーを示す（唐沢, 1996）。係留点が懇意的であったり、調節が十分に行われていなかったりする場合、推測のエラーにつながると論じられている（唐沢, 1996）。Gilovich (1991) は、推測のエラーの1つとして、他者の信念や感情を推測する場合、自分を中心にして考えてしまうという自己中心性バイアスを挙げている。実証的研究としては、他者の視点に関して、Vorauer & Cameron (2002) は、集団主義者（他者の視点に立てることを重視する主義者）は自他の表象が混ざり合うことによって、他者の視点を取るときに、自分の経験という係留点からの調節があまり行われなくなり、視点取得が失敗することを指摘した。こうした推測のエラーは、自己中心性バイアスの1つであると考えられる。

本実験においても、相手が面白いと思う冗談を自分が面白いと思った冗談と同じに推測している点から、自己中心性バイアスが働いた可能性が推測される。

上記のような結果が得られた一方、本実験には2つの改善点が残されている。1点目は、参加者の男女比に大幅な偏りがみられた点である。男女比を可能な限り同一にする必要がある。2点目は、事前に実験刺激を準備する際に冗談の面白さについて評定を求めたのが大学生10人と少人数であったため、1組とした3個の面白さや分かりやすさが完全に等質ではなかった可能

性がある。

本実験の仮説を検証し、上記の自己中心性バイアスが再び確認されるのかを検討する上でも、問題点を改善し、再度、同様の実験を行う必要があるだろう。

3. 実験2

3-1. 実験2の目的

本実験の目的は、実験1に残された問題点（男女比の調整、実験刺激の調整）を改善した実験を再度行い、同様の結果が再現されるかを検討することである。さらに、実験2では、新たな変数として、実験参加者が、相手の冗談が一番面白いと思う冗談を自分が何問当てられると期待できるかという「正答数の推測」を取り上げることとした。

3-2. 実験2の方法

実験参加者 実験1とは異なる、大学生の同性の友人同士のペア19組38名（男性10組20名、女性9組18名、平均年齢20.58歳、 $SD=1.09$ ）であった。なお、本実験の参加者は、葉山（2019）と同一であり、重複している。本実験の実施時期は、2008年11月～12月であった。

実験刺激 冗談刺激36個を使用した。実験1で使用した冗談刺激36個を、実験1の対象者36名による6段階の面白さ評定を基に、面白さが近い冗談同士が同一試行において呈示されるように、刺激を組み直した。

手続き 実験1と同じ手続きで行った。

3-3. 実験2の結果

正答数と冗談関係の認知の関連の検討 相手の冗談の好みに関する正答数を算出した結果、全部正解すると12個となるどころ平均3.92個（ $SD=1.38$ ）

となった。正答数と、冗談関係の認知の相関を算出した結果、実験1と同様、「他者理解感」と「被受容感」ともに有意な相関はみられなかった (Table 3)。

Table 3 正答数, 正答数の予測と冗談関係の認知の相関係数

	正答数	正答予測	他者理解感	被受容感
正答数	-	.07	.03	-.16
正答予測		-	.28 [†]	-.02
他者理解感			-	.40**
被受容感				-

[†] $p < .10$, ** $p < .01$

自分が何問当てられたかという正答数の予測をしてもらい、正答数の予測の平均を求めた結果、5.24個 ($SD=2.30$) となった。その予測と実際の正答数の相関を求めた結果、 $r=.07$ となり、無相関であった。さらに、実験参加者が行った自身の正答数の予測と冗談関係の認知の相関を求めた結果、有意傾向であるが、「他者理解感」と有意な正の相関 ($r=.28, p < .10$) がみられた。

面白さの評価の推測の正確さと冗談関係の認知の関連の検討 冗談刺激の各36個に対して、回答者Aの「相手(B)が思う白いと思うだろう程度(6段階評定)」と回答者Bの「自分が面白いと思う程度(6段階評定)」の相関を求めた。38名の相関の平均は、 $r=.24$ ($SD=0.15$) となった。こちらも実験1同様、有意に0よりも高い値であった。実験1と同様に、回答者ごとに算出されたこの相関値を標準化した得点を「推測の正確性」を示す指標として、冗談関係の認知に含まれる「他者理解感」と「被受容感」との相関を算出した (Table 4)。

Table 4 推測の正確さ指標と冗談関係の認知の相関係数

	推測の正確さ	他者理解感	被受容感
推測の正確さ	-	-.20	-.39**
他者理解感		-	.40**
被受容感			-

** $p < .01$

冗談の好みに関するペア内の実際の類似度 36個の冗談に対して感じた面白さの程度に関して、ペア内で相関を求めた結果、面白さの評定は1ペアを除き、16ペアで中程度の正の相関 ($r = .00 \sim .56$, 平均 $r = .25$) を示した。また、各12試行で「一番面白いと感じる冗談」がペア内で実際に一致した個数の平均を求めた結果、4.39個 (12個中) となった。

自他の冗談の好みの類似度の推測 各冗談の面白さについて、各参加者がペア内でどの程度冗談の好みは類似していると推測するかを検討するため、個人内で「冗談に感じた面白さの程度」と「相手を感じると思われる面白さの程度」の相関を求めた。その結果、全ての回答者において、実験1と同様に強い正の相関 ($r = .48 \sim .99$, 平均 $r = .77$) が認められた。さらに、3つの冗談の中で、「自分が一番面白いと感じた冗談」と「相手が一番面白いと感じると思われる冗談」の選択が個人内で一致している個数の平均を算出したところ、平均7.97個であった。

3-4. 実験2の考察

実験2では、実験1の問題点を改善した後、結果の再現性を確認するため同様の実験を行った。その結果、実験1とほぼ同様の結果が得られ、本実験からは、「冗談関係の認知が形成されているほど、相手の好みを当てられるため、正答数が多い」という仮説は支持されなかった。また、実験1で報告された、自分が面白いと思った冗談と相手が面白いと思う冗談を同じに答える実験参加者が多いという現象は実験2においても再現された。他者理解感

が高くなるにしたがって、相手の好む冗談を当てられるという期待が高くなる一方で、正答数とは何の関連もみられないことにより、他者理解感が高まることは、他者の好みを正しく当てることには繋がらないことが示唆された。

以上の結果から、実験1で報告された冗談の好みを推測する際に自己中心性バイアス (Gilovich, 1991) が起こっているという結果は、本研究における実験的手法においては、頑健であると結論付けられる。自己中心性バイアスによって、自分の経験という係留点からの適切な調節が行われなことは、他者の視点の取得において障壁になり、結果として「自分が面白いと感じたから、相手も面白いと感じるだろう」という自己中心的な推測に帰結しやすくなる。推測に関して、Prentice (1990) は、相手について多くの知識を持ち、その知識構造が親密ではない他者についての知識構造より精緻なものであれば、ステレオタイプに頼った判断をしなくなり、推測がより正確になると論じている。これはまさに関係スキーマによって判断している、より精緻な推測であると言えるが、冗談関係の認知に含まれる他者理解感はそうした働きを十分に果たさなかった。

4. 本研究のまとめ

本研究では、冗談関係の認知の正確性を検討することを目的として、相手の冗談の好みに関する正答数や、相手がどの程度面白いと思うかの推測の正確さを取り上げて、冗談関係の認知の関連を検討した。

その結果、実験1及び実験2で一貫して得られた結果として、被受容感、相手を感じる面白さの評定の推測に負の相関を示すことが明らかとなった。他者理解感、正答数とは何の関連もみられなかったが、その一方で、他者理解感、自身の正答数の推測に対しては正の相関があることが示された。冗談関係の認知が形成されている個人は、相手の冗談の好みを当てられるという期待を形成するということが示唆された。以上の結果に基づき、他

者の好みの推測における冗談関係の認知の関係についてのモデルを Figure 3に示す。

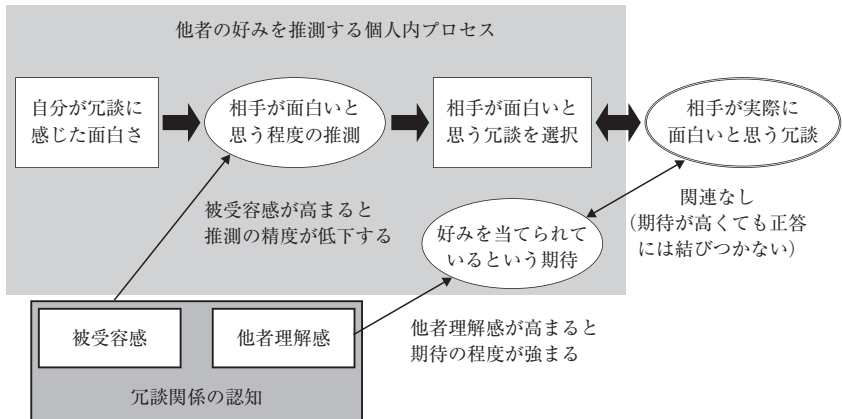


Figure 3 他者の好みの推測における冗談関係の認知の関係 (モデル)

実験1及び実験2ともに、多くの実験参加者は、ペア内の冗談の好みの類似度を実際よりも高く見積もり、自分が好む冗談を相手も好むと推測する傾向がみられた。こうした結果は、冗談を友人に言う場合、相手と自分の好み が似ているという認知を背景として、自分が面白いと思った冗談を相手に言っても大丈夫だろうという判断をするという場合が想定される。特に本研究においては、係留と調節の推測の観点から考察を行い、自己中心性バイアスとして解釈を行った。こうした観点を導入すると、相手が好む冗談を選択するという他者の立場に立つのではなく、自分が面白いと思った冗談を言うという自己中心的な推測プロセスの存在が示唆される。同時に、他者を理解できているという感覚が強いと、本実験において自分は相手の冗談の好みを当てられているという期待は高まる。しかし残念なことにそうした期待が高いためからと言って実際に相手が面白いと思う冗談を当てられている訳ではない。

冗談関係の認知が不正確であるのか、もしくは、冗談関係の認知は比較的正確であるが、自己中心性バイアスが強く働いてしまっているのかは今後検

討を重ねていく必要があるだろう。特に、本研究で実施した実験には、いくつかの課題も残されており、本研究の実験結果から冗談関係の認知が不正確であると結論付けることは適切ではない。例えば、本研究で行った実験は実験刺激が日常場面のエピソードに関するものが多く、種類が偏っていた可能性がある点など、いくつかの問題点が残されている。多様な冗談を実験刺激に用いる際には、葉山・櫻井（2008a）で分類されたように、自己卑下的冗談、自己高揚的冗談、攻撃的冗談、他者高揚的冗談といった冗談を取り入れることも有効だろう。本研究で行った実験を今後はさらに改善し、様々な観点から実験を行うことを通して、知見を蓄積していくことが望まれる。

〔引用文献〕

- Baldwin, W.M. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, **112**, 461-484.
- Gilovich, T. (1991). *How We Know What Isn't So : The Fallibility of Human Reason In Everyday Life*, New York : Free Press. (守一雄・守秀子 (訳) (1993). 人間この信じやすきもの 光明社).
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008a). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究, **79**, 18-26.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008b). 過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスの検討 教育心理学研究, **56**, 23-34.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2010). 友人関係初期における冗談関係の認知の役割 筑波大学心理学研究, **40**, 35-41.
- 葉山大地 (2019). 友人に対する「冗談関係の認知」の正確性の検討 (1) 中央学院大学人間・自然論叢, **48**, 73-83.
- 唐沢かおり (1996). 社会的推論 山本眞理子・外山みどり (編) 社会的認知 誠信書房.
- Planalp, S. (1987). Interplay between relational knowledge and events. In R.Burnett, P. McGhee, & D. Clarke (Eds.), *Accounting for relationships..*, Methuen & Co. Ltd. pp.175-192
- Prentice, D.A. (1990). Familiarity and differences in self- and other-representations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 369-383.
- Radcliff-Brown, A.R. (1940 / 1952). *Structure and function in primitive society*

（ラドクリフブラウン， A.R. 青柳まちこ・蒲尾正夫（訳）未開社会における構造と機能（1975）. 新泉社.）

白崎博史・石黒謙吾（2007）. バカには絶対解けないナゾナゾ 朝日新聞社.

Vorauer, J. D., & Cameron, J.J. (2002). So close, and yet so far : Does collectivism foster transparency overestimation? *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 1334-1352.